

萩にあしあと残そうよ

「移住して三か月半となった」

令和元年(2019)
8月1日発行
—不定期発行—



念願の光景。夏みかんの実と
花の競演！(5/11)

「日々の暮らし」

今年四月十八日に市役所に
転入届を出して萩市民となっ
た私。八月を迎えて、萩暮ら
しも三か月半となりました。
ようやくといえましょう、ま
早くもといえましょう、ま
あ事故ケガ病気もなく、まず
はここまで順調といえます。
炊事洗濯、掃除にごみ出し
と、これまで当たり前のよう
に家族にもらっていたこと
とを、すべて自身がすること
への不安は、予想を反してす
んなりと解消。数日おきにス

「あしあとノート」

◆町内会行事に飛び入り◆

五月五日に近所の神社の祭
礼がありました。見学だけの
つもりで行ったのですが、「弁
当もあるけ、その法被を着
てまざったらええ。」と。飛び
入りで神輿を担がせてもらい
ました。アパート等に住む人
は、まず町内会に入ること
は、ありませんが、七月から正
式に加入させてもらい、八月一
日の盆踊りでは準備や運営
に加わる予定です。



後小畑町内会の一員です。
(うしろおばた)

◆友人の田植えの手伝い◆

萩に越してきた際、隣接す
る美祢市に住む二十年來の友
人が、「こうちゃん、コメは買
わんでええよ。」と、自身の水
田で収穫した米をプレゼント
してくれました。五月下旬、
田植えをするというので、わ
ずかながら手伝いをし、結局
焼き肉をご馳走になって帰っ
てきました。

◆自転車を購入◆

車があるのであえて自転車
を買うこともないのでしょう
が、市街地散策には小回りの
きく自転車が一番です。軽い
運動にもなるし、探検もでき
るし、駐車料金もからない
ので便利。仕事のリズムが掴
めてきたら、通勤に利用して
も良いなと思っています。

◆斎藤茂吉鴨山記念館へ◆

塩原温泉にもゆかりの歌人
斎藤茂吉の記念館が島根県湯
抱温泉にあり訪ねました。茂
吉が柿本人麻呂研究において
終焉の地と定めた場所です。
訪れる人も少なく、存続が危
ぶまれる状況と聞いて、茂
吉の気配を感じました。



「自由気ままな歌日記」

人影の遠ざかりたる歌の碑に
我れ寄り添へる

木漏れ日のもと
(五月一二日、鴨山記念館)

風にのり風に逆らふ海鳥の
自在な様に見入りたるかも
(六月一五日、日曜の午後)

旅立ちの日より

寂しさ勝るのは
郷の遠さを知りたればこそ
(六月二三日、一時帰郷)

「仕事はどうだい？」

三か月の試用期間を無事終
了して、ひとまず正社員にな
ることができました。これま
では、かなり違う内容の仕
事です。戸惑うことも多
いし、萩市内が主と聞いてい
たら大違い！山口市や宇部市、
遠くは下関市や岩国市まで出
かけていきます。

まだ不安がいっぱいですが、
七月からは基本的に単独で
動くことになりましたので、
道を覚えながら行動範囲を広
げているところです。

チョンマゲビルは、実は
二十年も作り続けているのに、
県外はおろか県内にも知れ渡
っていません。「何それ？」と
聞かれることも多いので、ま
ずは認知度を高めることが自
分の仕事なのかなと思うよう
になりました。



博多の百貨店で7日間の
僱事に出店しました。

〔萩に関する自由研究〕

『萩の夏みかんについて』

「夏みかんと土塀」という景色を気に入って、旅行に来れば必ずその景観を写真に収めてきました。それは萩に越してから変わらず、折に触れて目を楽しませてもらっています。

今回は、萩博物館で開催の企画展「萩の夏みかん物語り」の展示から、その魅力に迫っていくことにしました。

まず、夏みかんの学名は、シトラス・ナツダイダイ・ハヤタ (Citrus Natsudaidai Hayata) といえます。これは、一九一九年に早田文蔵博士が新種として発表したことに由来する名称なのです。

ということは、日本原産種という扱いになるわけですが、このストーリーが面白いのです。夏みかんの原樹は、山口県長門市大日比の西本家にあります。江戸時代中期の一八世紀に、近くの海岸に流れ着いた見たことのないミカンの種

子をまいて育てたものといわれています。それはアジアのどこかが原産ということになりそうですが、はっきりしないために日本の名称が学名になったのです。なんだか不思議ですね。

ちなみにこの夏みかん原樹は、昭和二年四月八日に国指定史跡及び天然記念物に指定されています。



明治時代の初期、萩藩の士族たちは生活に困窮していました。それは、江戸時代末の藩庁の山口移転に続き、明治維新・廃藩置県によって、萩は政治・経済の中心ではなくなってしまう、藩の重臣たちはこの地を離れ、また萩に残った士族たちは禄を失い日々の生活に困窮することになったからなのです。

こうした状況を見かねて、明治九年（一八七六）、長州藩

の役人小幡高政が、生活に困っている士族救済のために「耐久社」という団体を設立し、夏みかんの苗木を大量に生産し栽培を推奨します。

彼は、もともと武家屋敷地にも植えられていて、あまり手をかけなくても実る夏みかんを、主の居なくなった広い武家屋敷地に植えて、大々的に栽培しようと試みたのです。

全国で初めて、夏みかん栽培に取り組んだ小幡高政（文化一四（一八一七）〜明治三九（一九〇六））は、「夏みかん栽培の父」といわれます。彼は、周囲の冷ややかなまなざしを感じながらも、自らも率先して邸宅（現在の田中義一別邸）周りの屋敷地（現在のかんきつ公園）にも夏みかんを植えていきました。

栽培から十年程たった頃には、旧萩城下の空き地のほとんどに夏みかんが植えられ、出荷量も相当なものとなりました。また、夏みかんはとても高値で取引され、夏みかん五個で米一升分の価格であったそうです。なんと、明治三

〜四〇年代（今から百〜百十年前）には、当時の萩町の年間予算の八倍もの生産額を誇っていました。



ところが、夏みかん栽培は一九七〇年頃を境に衰退していきます。その頃までは、萩の夏みかんは鉄道を使って遠くは北海道や東北まで全国各地へ出荷されていましたが、ミカンの仲間が出回るようになって、次第に生産が減っていくこととなったのです。

しかし、夏みかん畑は、それまでの間、夏みかんが高値で取引され続けたことで、風から守るための土塀や長屋などとともに維持されてきました。このため、武家屋敷地の区画も大きく変わることがなく、「江戸時代の地図が使える

まち」、「土塀と夏みかんのまち」という景観の維持形成に大きな役割を果たしたといえます。

萩の経済を支え、景観を形成してきた功績を知ると、「夏みかんといえは萩」というよりは「夏みかんあつての萩」と述べるべきかとも思えてきました。

〔お気に入りの萩景色〕

萩の三角州が一望できる場所が田床山（たどこやま）です。箱庭みたいですね。

